

「神の御心にそって歩む
(ご自身の国と栄光へ招いてくださっている神にふさわしく歩む)」

I テサロニケ 2:10-12

2021.7.18 南与力町教会朝拝・久礼集会

序、パウロの宣教についての弁明の最後

朝の礼拝ではパウロがテサロニケの教会へ書き記しました手紙から御言葉に聞いています。2章からパウロは自分たちのテサロニケでの宣教について弁明をしてきました。なぜ弁明をしなければならなかったのかというと、パウロの敵対者たちが、パウロたちを非難していたからです。パウロのたちの宣教は、他の宗教家や哲学者たちと同じように結局は自分の利益のために、私利私欲のために行っているに過ぎない。パウロはそういう非難に対して「そうではない」ということを弁明する必要があったのです。そして今日の個所がその弁明の最後のところですよ。

1. 清く、正しく、非難されることのなかったパウロたち (2:10)

まず2章10節では次のように語られます。

「あなたがた信者に対して、わたしたちがどれほど敬虔に、正しく、非難されることのないようにふるまったか、あなたがたが証しし、神も証ししてくださいませ。」

「あなたがたが証しし、神も証ししてくださいませ」とは、「あなたがた自身が証人であり、神もまた証人です」という言葉です。パウロは言わば、テサロニケ教会の人々と神様を証人として呼び出しているわけです。

では何の証人かと言えば、それは「あなたがた信者に対して、わたしたちがどれほど敬虔に、正しく、非難されることのないようにふるまったか」ということを証しする証人だということです。ここで「敬虔に」と訳されています言葉は、「きよく」という意味があります。パウロたちはきよく、正しく、非難されることがないように、テサロニケ教会の人たちに対してふるまった。そのことについては、テサロニケ教会の人たち自身が、さらには神が証人です、と言っている。そうして不信仰者たちによるパウロたちへの非難がいかほど不当なものであるかをここで確認し、強調しているのです。

2. 父親が自分の子どもに対するように一人一人に呼びかけたパウロ (2:11)

そして続く2章11節からは次のように語られます。

「あなたがたが知っているとおりに、わたしたちは、父親がその子供に対するように、あなたがた一人一人に呼びかけて、神の御心にそって歩むように励まし、慰め、強く勧めたのでした。」

ここでパウロは自分たちのことを「父親」にたとえています。振り返りますと、パウロは2章7節で「わたしたちは、キリストの使徒として権威を主張することができたのです。しかし、あなたがたの間で幼子のようにになりました」と言って、自分たちを「幼子」にたとえていました。使徒としての権威を主張することができたにも関わらず、そうはせず、むしろ「幼子のように」へりくだった、ということをやっていたわけです。そして2章7節の後半からのところでは「ちょうど母親がその子供を大事に育てるように、わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命

さえ喜んで与えたいと願ったほどです。あなたがたはわたしたちにとって愛する者となったからです」と語っていました。そこではパウロは自分たちを「母親」（正確には「乳母」）にたとえていました。母親が自分の子どもを大事に育てるように、パウロたちもテサロニケ教会の人たちをいとおしく思い、神の福音ばかりでなく、自分の命さえも喜んで与えたいと思っていた。それほどに教会の人たちのことを愛していた。そのことを「母親」というたとえ・イメージを用いて語っていたのです。

そして今日のところでパウロは自分たちを「父親」にたとえているのです。ではパウロはここで「父親」というイメージによって、一体どういうことを伝えようとしているのでしょうか。パウロは11節からのところで「あなたがたが知っているとおりに、わたしたちは、父親がその子供に対するように、あなたがた一人一人に呼びかけて」と言っています。「あなたがた一人一人」という言葉が強調されています。父親は自分の子ども一人一人を愛しているでしょう。そのようにパウロも教会の一人一人のことを思い、父親のような愛をもって呼びかけた、と言っているのです。それはただ「仕事」だから、教会全体に対して説教した、ということとは違うのです。たとえ実際には教会全体に説教したとしても、その一人一人に対して、父親のような愛をもって語りかけ、呼びかけたのです。

3. ご自身の御国と栄光に招いてくださっている神にふさわしく歩む (2:12)

①神にふさわしく歩む

ではパウロたちは教会の人たちにどういったことを語ったのでしょうか。12節には「神の御心にそって歩むように励まし、慰め、強く勧めたのでした」と言われています。当時、父親は子どもに対して道徳的な訓練、しつけをする役割を担っていました。子どもがどのように道を歩んでいくべきかを教える。また悪い道に行ってはならないことも教えたでしょう。パウロも父親が子どもにするように、教会の人たちに対し、どのように歩んでいくべきかを教えたのです。それはどのような歩みかと言えば、「神の御心にそって歩む」ということです。この「神の御心にそって」と訳されています言葉は、原文では「神にふさわしく」という言葉が使われています。パウロは教会の人たちに「神にふさわしく歩むよう」勧め励ましたのです。

そして12節の後半では「御自身の国と栄光にあずからせようと、神はあなたがたを招いておられます」と締めくくられています。新共同訳聖書では二つの文に分けて訳してありますが、もともとはこの12節は一つの文章です。新改訳聖書では次のように訳されています。

「ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。」

つまり、パウロは次のように言っています。神はあなたがたをご自身の御国と栄光へと召して下さっている、招いてくださっている。その神にふさわしく歩むよう、わたしたちはあなたがたを励まし、慰め、強く勧めたのです。

では「神にふさわしく歩む」とは一体どういうことでしょうか。それはここでは詳しく語られていませんが、この手紙の4章でそのことが教えられ、展開されています。4章1節～5節をお読みいたします(p.377)。

「さて、兄弟たち、主イエスに結ばれた者としてわたしたちは更に願い、また勧めます。あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを、わたしたちから学びました。そして、現にそのように歩んでいます。どうか、その歩みを今後も更に続けてください。わたしたちが主イエスによってどのように

命令したか、あなたがたはよく知っているはずですが。実に、神の御心は、あなたがたが聖なる者となることです。すなわち、みだらな行いを避け、おのおの汚れのない心と尊敬の念をもって妻と生活するように学ばねばならず、神を知らない異邦人のように情欲におぼれてはならないのです。」

さらに4章7節では「神がわたしたちを招かれたのは、汚れた生き方ではなく、聖なる生活をさせるためです」と言われています。つまり、「神にふさわしく歩む」とは、「神を知らない異邦人のように情欲におぼれて」汚れた生き方をするのではなく、「聖なる者」となり、「聖なる生活」をすることなのです。

さきほどお読みしましたレビ記20章26節には次のようがありました。

「あなたたちはわたしのものとなり、聖なる者となりなさい。主なるわたしは聖なる者だからである。わたしはあなたたちをわたしのものとするため諸国の民から区別したのである。」

この「あなたたちは…聖なる者となりなさい。主なるわたしは聖なる者だからである」というフレーズはレビ記の中に繰り返し出てくる大切なものです。私たちが「神にふさわしく歩む」とは、聖なる神様にふさわしく、私たちが「聖なる者」として生きる、歩んでいくということなのです。

そしてそれは私たちが愛をもって生きる、ということと無関係ではありません。パウロはこの手紙の4章9節で「兄弟愛については、あなたがたに書く必要はありません。あなたがた自身、互いに愛し合うように、神から教えられているからです」と言っています。神は私たちを愛してくださいました。罪を犯し神の敵であった私たちを赦し、救うために神はご自分の独り子イエス・キリストを十字架につけ、犠牲にされました。それほどに神は私たちを愛し、憐れんでくださったのです。それゆえ「神にふさわしく歩む」とは、私たちがその愛と憐れみに満ちておられる神様に倣って生きていくということでもあります（エフェソ 5:1）。私たちがお互いへの愛と憐れみをもって生きていく、歩んでいく。それが私たちを愛し抜いてくださった神様にふさわしく歩むということです。

②「励まし、慰め」の必要

しかし、そのように神にふさわしく歩むことは簡単なことではありません。私たちはなお罪を犯してしまう弱いものです。自分の欲望に引きずられるように罪を犯し、汚れた生き方をしてしまう。そのような危険や誘惑が常にあるのです。また愛のない生活、生き方をしてしまう。互いに愛し合うどころか、互いに裁き合ってしまう。そのような弱さと罪深さが私たちにあります。パウロもそのことをよく知っていたでしょう。しかしだからこそ、パウロは父親のような愛と思いやりをもって、一人一人に、「神にふさわしく歩むよう」、「励まし、慰め、強く勧めた」のでした。

「慰める」という言葉が使われているのは、テサロニケ教会の人たちが苦難の中にあっただからだと思います。この後、2章14節でパウロは次のように語っています。

「兄弟たち、あなたがたは、ユダヤの、キリスト・イエスに結ばれている神の諸教会に倣う者となりました。彼らがユダヤ人たちから苦しめられたように、あなたがたもまた同胞から苦しめられたからです。」

テサロニケ教会の人たちは同胞から迫害され、苦しみを受けていたのです。そういう苦しみの中でも忍耐し、「神にふさわしく歩み続けるよう」、パウロは励まし、慰めたのです。

③ご自身の御国と栄光に招いてくださっている神

しかしなぜそれが「慰め」となるのでしょうか。それはその神が「御自身の国と栄光にあずからせようとあなたがたを招いておられる」お方だからです。神にふさわしく歩んでいくことには苦しみが伴いま

す。しかしそれは決して苦しみで終わるものではありません。神の御国と栄光へとその歩みは確かにつながっているのです。神が私たちをそこへと招いてくださっている、召してくださっているのです。私たちがその神の招きにふさわしく歩いていくとき、その道の先には必ず神の御国というゴール、栄光に満ちたゴールが待っています。そのような希望があるからこそ私たちは苦難があったとしても忍耐し、神にふさわしく歩み続けることができるのです。

パウロはローマの信徒への手紙 8 章 18 節で次のように語っています。

「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと思えます。」

私たちは、この世にあっては苦しみがあります。パウロ自身も多くの苦しみを経験した人でした。しかしそのような「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りない」とパウロは言うのです。

私たちはこの世においては苦しみがあり、労苦があり、悲しみがあります。私たちの体は衰えていき、やがて死を迎えます。しかしそれで終わりではないのです。神が私たちをご自分の御国と栄光へと招いてくださっているからです。完成した神の御国は「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」、そのような世界です（黙示録 21:4）。そして私たちの体も贖われます。今私たちの体は朽ちていく弱くもろい体ですが、その時には朽ちることのない輝かしい栄光の体に変えられるのです。イエス様が再び来られるとき、そのことを実現してください。

④神の国を受け継ぐために

私たちはその時まで、「神にふさわしく歩いていく」必要があります。どう歩んでもよいというわけにはいきません。なぜでしょうか。エフェソの信徒への手紙 5 章 5 節には次のように記されています。

「すべてみだらな者、汚れた者、また貪欲な者、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません。このことをよくわきまなさい。」

汚れた者、貪欲な者は神の国を受け継ぐことができません。しかしそうならないために、パウロは教会の人たちに「神にふさわしく歩むよう」、「強く勧めた」のです。この「強く勧める」とは「おごそかに命じる」とも訳すことができます。神に国を受け継ぐためには、そこに最終的に入るためには「神にふさわしく歩む」ことがどうしても必要です。このことについては妥協できない。「どっちでもいいよ」と言うわけにはいかなかったのです。ですからパウロは強く勧め、おごそかに命じたのです。

結論

私たちはもともと「神を知らない異邦人」であり、罪と汚れの中に生きていました。そのような私たちは到底神の国に入ったり、その栄光にあずかったりすることなどできない者でした。しかし神様はそういう私たちを憐れみ、愛してくださって、福音を通して私たちを召してくださいました。イエス・キリストの十字架の血と聖霊によってわたしたちを清め、御自分の民、御自分の子としてくださいました。神が召し、招いてくださったからこそ、私たちは福音を聞いて信じることができました。しかしそこで終わりではありません。神様は今も私たちをご自身の国と栄光に招き続けてくださっています。ですから、私たちも神の国と栄光というゴールに至るまで、たとえ苦難があったとしても、神様にふさわしく、聖なる者として、互いへの愛をもって歩んで参りましょう。